特集論文

祓えぬ負債に憑かれること
――ニジェール西部における調査経験から――

佐　久　間　寛*

Debt That Cannot Be Paid in Western Niger

Sakuma Yutaka*

Abstract

Against a backdrop of the European debt crisis and a series of widespread financial crises that started with the 2008 bankruptcy of Lehman Brothers, the debate regarding debt has been steadily intensifying in recent years.

The book *Debt: The First 5000 Years* (2011) by David Graeber made substantial use of an enormous number of ethnographic resources. In his book, Graeber proved that debt is not merely an economic phenomenon; it also involves the social dimensions of obligation and indebtedness. Graeber made it abundantly clear that the global movement of financial capital is not merely the pursuit of personal gain; it is also buttressed by the morality of the idea that "one has to pay one's debts". Although it was a tremendous achievement, Graeber's argument has a weakness in that it reduced to economic debt that can be quantified using money, which he modeled after modern Western Europe, as well as excessively segmented social debt, which he modeled after non-Western European countries.

This paper focuses on the complicated intertwining of the economic and social debts that were generated in a specific place. The dynamism of debt will also be clarified.

In this paper, I describe the following case that I personally experienced in February of 2018 in Niamey, the capital of the Republic of Niger. I called my former research assistants who lived in the village to Niamey. I was able to experience an emotional reunion with them, and we spent some quiet time together. However, the situation became completely different after we said our goodbyes. Over the phone, my former assistants expressed their dissatisfaction about how they had shouldered a debt for my sake. With obvious concern, I went back to where they were and offered to take over the debt. However, they refused my offer and did not even inform me of the debt's amount.

What had been behind their behavior? I interpreted the interactions as follows: Clearly, the

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所；Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies / 3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-city, 183-8534 / sakumayutaka@aa.tufs.ac.jp

economic theory of “maximizing one’s own gain” was not the reason behind my former assistants’ actions. Instead, their actions had been motived by the peculiar brand of logic called “maximizing the other person’s social debt (indebtedness) and minimizing your own social debt”. If correct, this theory, due to something that cannot be said or paid, goes against Graeber’s point of view that the characteristic of debt can be quantified and that the potential of debt as something that strengthens social ties can emerge instead.

キーワード：負債，贈与，ニジェール，ソンガイ系社会
Keywords: debt, gift, Niger, Songhai societies

はじめに

東西冷戦崩壊後の世界では，各国の規制緩和や情報技術の発達にともない，金融サーヴィスが飛躍的な拡張をつづけている。貧困者むけのマイクロクレジットや，携帯電話をつうじた送金システムの普及により，その拡張の波はアジアやアフリカの農村にまでおよびつつある［Elyachar 2010; IBRD 2018; Triki and Faye eds. 2013］。一方，2008 年のリーマンショックにはじまり，欧州の債務危機へと波及した一連の金融不安は，こうした情況の問題点を浮きぼりにした。金融サーヴィスの利用は負債を負うことと同義であり，その「負」の影響はときに人の生存をも揺るがしている。

こうした時代情況をひとつの背景に，負債をめぐる研究は学の分野を超えて活発化してきた。哲学ではサルトゥー＝ラジュ［2012］，政治思想ではラッツァラート［2011］，経済学ではシェネ［2011］などが代表作である。これら近年の負債研究では，たんに個別の債務問題をいかに解決するかという点以上に，そもそも「人間にとり負債とは何か」という根本的な問いが追求されてきた。そこに意義があったことはたしかであるが，だからこそ気がかりなのは，これらの研究が西欧的な負債の過度な一般化という制約を抱えている点である。たとえば，人間が金融的な破局のコストとリスクを引き受ける主体（＝「借金人間（ホモ・デビトル）」）へ再構成される過程を論じたマウリツィオ・ラッツァラート［2011］の議論は，1980 年代以降の欧米における新自由主義的な経済情況下の分析には有効であるが，近年小規模金融が本格的普及をはじめたアフリカの農村――そこでは多くの場合賃金労働の機会も限られている――の分析にそのまま適用することはできない[1)]。そこで有効となるのが西欧と非西欧を同一地平で捉える文化人類学の視座である。

1）いわゆるモラル・エコノミー論争を想起すればただちに理解されるとおり，アジア・アフリカの農村社会では，経済的なコストとリスク（金融的コストとリスクを含む）が個人に集約されることなく人間関係のネットワークに分散されるケースが珍しくない［cf. スコット 1999; 杉村 2004］

じっさい負債は人類学の古くからある課題である。その源流はおおむねふたつに整理できる。ひとつはマルセル・モースをひとつの起点とした，贈与論の変奏としての負債論である。これは贈与にともなう負債感，とりわけ贈与を構成する三つの義務――与える義務，受けとる義務，お返しをする義務――のうちお返しをする義務と関わる主題であり，モースにおいては示唆されていたにすぎないこの問題を人類学的に展開した代表的論者がエドマンド・リーチである［リーチ 1991］。

第 2 は後期カール・ポランニーの議論をひとつの起点とした，貨幣論の変奏としての負債論である［ポランニー 1998; cf. 佐久間 2018］。アダム・スミス以降の経済学は，物々交換から貨幣が生まれ，その後現金を用いない信用取引が発達したと想定してきた。ポランニーによるとそうではない。人類社会においては，負債こそが貨幣にも市場にも先行して生じ，この負債を「払う」という機能を担う形で後に貨幣と呼ばれることになるオブジェクトが発生した[2)]。ここでいう負債とは経済的というよりは社会的な負債であり，多くの場合宗教的な意味を持っていた。こうしたポランニーの議論を独自に展開した栗本慎一郎は，「貨幣は商品から生じてはこないし，同じくかならずしも金ではない」こと，「機能の面からみれば，支払い手段としての用法が最も基礎的なものである」こと，そして「支払いは，けっして，人間の活動の物の面に限られることはなく，宗教的負債，精神的負債を「祓（払）い落とす」ことにむしろ出発点がある」ことを指摘している［栗本 2013: 181］。

贈与論的負債論にせよ貨幣論的負債論にせよ，人類学の議論は，負債が形式的な経済の位相に限定しえないこと，むしろ元来それは社会関係を生み出す機序であることを主張してきた点で共通している。こうした議論をふまえつつ，社会的負債がいかに経済化されてきたかを，理論的かつ歴史的に明らかにしようと試みたのが，デヴィッド・グレーバーの『負債論』［2016］であると位置づけられる。同書は，膨大な民族誌的資料を駆使して，負債がたんなる経済現象ではなく社会的次元と関わることを論証し，金融資本の世界史的運動が私的利益の追求のみならず「負債は返さねばならない」というモラルに下支えされていることを解明した。西欧と非西欧，社会的負債と経済的負債を総合する展望を示した同書により，負債研究は新たな時代を迎えたといっても過言ではない。

とはいえグレーバーの議論にも問題がないわけではない。そのひとつは，社会的な負債と経済的な負債との過度な理論的分断についてである。グレーバーによれば社会的な負債（義務などの感覚）と経済的な負債の相違点とは，後者が貨幣によって計量化可能であり，前者はそれが不可能であるという点にもとめられる。

2) こうしたポランニーの負債論は，近年のポランニーの再評価のなかで注目されている論点の一つである［cf. Saiag 2014; 佐久間 2018］

> ただの義務，〔…〕，あるいはだれかになにかを負っている〔借りがある〕という感覚，それと負債との違いとは，正確に言えば，なんであろうか？　答えは単純だ。貨幣である。負債と義務の違いは，負債が厳密に計量化できることである。
>
> ［グレーバー 2016: 34］

社会的負債が経済的負債に変質する決定的契機に暴力を見いだすグレーバーの立論からして，両者を概念的に弁別することは必要不可欠である。ただし現実の負債の考察にあたっては，こうした単純化が弊害となりかねない。たとえば，「負債と義務の違いは，負債が厳密に計量化できることである」と彼はいうが，計量化できることと計量化することとは別である。このような視点を確保しておかないと，計量化できるものをあえて計量化しないことで経済的負債を社会的負債に送りかえすような動きを見落としてしまいかねない[3)]。

本稿では，ニジェールのフィールドを事例に，まずは経済的な位相に焦点を絞って負債を考察し，そこから溢れでる社会的な負債の位相を掬いとることを試みたい。より具体的には，わたしが今年の調査中に経験した，ある出来事に焦点をあてる。その考察を通じて，経済的でありながら数えることも払うこともできぬ負債のダイナミズムを明らかにすることが本稿の目的である。

I　概要

本稿の舞台となるニジェール共和国は，西アフリカの内陸国である。わたしはその北西部で 2004 年から 2007 年まで住込み調査をした。2010 年にクーデターが生じて以来，この地域には渡航待避勧告が出ているため[4)]，現在はもっぱら首都ニアメにおいて調査を継続している。

ニアメを含めたニジェール西部でもっとも話者人口が多い言語はソンガイ語であるが，負債はこの言語で "garaw" という。逆に借りたものの返済は "bana" という。 "garaw" の類義語に " hi（貸借）" があるが，ある研究者が述べているように，"hi" が指すのは現物の貸借であるのに対し，"garaw" が指すのはもっぱらお金の貸借り，いわゆる借金である[5)]。たとえば

3) 同様のことは，等価交換にもとづく経済的な負債を批判し，社会的負債（＝借り）の復権を主張するサルトゥー＝ラジュ［2014］にもいえる。
4) 実際この地域は北はアル＝カーイダ系の AQIM（イスラーム・マグレブのアル＝カーイダ），南は IS 系のボコハラムという二つの自称イスラーム組織の活動に挟撃されており，2017 年 10 月にはアメリカ合衆国の特殊部隊の兵士 4 名が殺害される襲撃事件もおきた。
5) 「"hi" が指すのは常に現物の貸借であり，現金の貸与（garaw）ではない」［Olivier de Sardan 1982: 204］。

土地の貸借りに用いられるのは "hi" であり "garaw" ではない[6]。

ただし，"garaw" には借金に還元できない独特の意味の膨らみがある。ここにあげたのは，住込み調査時の助手サンダが語ってくれた恋愛譚の抜粋である。

> 月曜日の朝 10：00，俺と俺の友達 S，俺の友達 I，俺の友達 M は，もう一度トーマレ村に行くことについて相談しあった。なぜって最初俺たちが行ったとき，俺たちは恥ずかしい思いをしたからだ。なぜって〔トーマレ村の〕みんなは俺たちをすごく，すごくもてなしてくれた。俺たちはまだお返しをしていない。だから今度は俺たちも準備をして，借り（garaw）を返したかった。
>
> ［サンダ 2006 年 7 月 17 日］

友人と恋人の村を訪れたところ，恋人とその友人にてあつく歓待された。そのお返しのためもう一度サンダたちは恋人の村を訪れる。この返済すべき何かをサンダは，"garaw" と表現する。この場合の "garaw" はもちろん借金のことではなく，歓待されたことによって生じた「借り」，「恩」あるいは「負い目」である。このようにソンガイ語の "garaw" とは，英語の "debt" とおなじく経済的・物質的な意味ばかりでなく社会的・精神的な負債の意味を持つ[7]。

次に，語彙だけでなく "garaw" と呼ばれる制度や実践について紹介しよう。まず指摘できるのは，ニジェール西部の農村は茶やカカオのような換金作物が栽培されていないこともあり，制度的といえるような信用の仕組みは限られているという点である[8]。小規模金融も普及しているとはいいがたく，そもそも農村ではまとまった現金が必要になる機会自体が多くはない。したがって借りようにも現金を持ちあわせている者が少ない。また利息を取ることはイスラームの規範として禁じられていることから，金貸しを生業とする者は皆無である。

---

6) ただし詳しくは脚注 8 に記すとおり，当事者によって土地が負債（garaw）の対象になると考えられているわけではないとはいえ，この社会の土地制度は負債論的観点なくしては理解できない性質のものである。

7) こうした "garaw" の独特のニュアンスを伝える他の例としては，「貴族の言葉は負債（garaw）」ということわざを挙げることができる［Bornand 2005: 144］。その意味は「貴族の言葉は取り消しえない」，つまり「貴族は嘘をつかない」ということである。これは，ソンガイ語の "garaw" に「違えることなくかならず返されるべきものごと」というニュアンスがあるからこそ意味をなす言表である。

8) ニジェール西部の住民によってはかならずしも "garaw" として明確に概念化されていない制度にまで射程を広げるなら，土地制度という，社会生活の基盤となる制度にも負債の問題が関わっている［佐久間 2013: 259-275; Sakuma 2017］。同地域の農村社会における土地とは，排他的な所有物というより，他者からの「贈与」物にちかい。ゆえにある土地で生活を営む者は，それを贈与してくれた者に負債を負う。そうした社会的負債は通常労働を通じて返済される。ただし，土地贈与の対価としてどの程度の労働が求められるかは規則化されていない。むしろ土地を与えられたものは，自由かつ自発的に働きに行くことが規範化されている。

数少ない制度として例示されるのは，以下の 3 点である [9]。第 1 は，結婚式・命名式における雑貨屋での前借である。以下は，住み込み調査時に日々のつれづれをソンガイ語で日記調に記してくれた助手ハッサンの記述である。

> 人が結婚するとき，前借（garaw）をして品々を得ます [10]。結婚式が終わると，花婿の父親が前借した品のお金を払いに雑貨屋へ行きます。
>
> ［ハッサン 2006 年 2 月 20 日］

大量の財・カネ・サーヴィスが動員される結婚式・命名式においては，現金を準備することが必須である。雑貨屋を営む商人は通常前貸し（ツケ）を認めることはないが，こと結婚式・命名式をめぐっては，式で集まるご祝儀によって確実に返済される可能性が高いため，特例的に式の主催者に対する前貸しが認められている。

第 2 の事例は，死亡した家畜の掛売制度（garama）である。

> 屠畜業者に連れて行く暇がないまま家畜が死んだ場合，村の人間に掛売（garama）します。ただしこの掛売は前貸（garaw）にほかなりません。
>
> 家畜の解体が終わると，持主は屠畜人に，3 種類に小分けするよう伝えます。ひとつは 250CFA フラン，もうひとつは 500CFA フラン，さいごのひとつは 1,000CFA フランです。
>
> 村で掛売がおこなわれると，ただちにどこそこで掛売があるぞと村人に伝えられます。人々は前借というかたちで〔その場で現金を払わず後払いするかたちで〕，掛売に参加します。
>
> 持主が支払日を決めます。
>
> ［ハッサン 2006 年 2 月 27 日］

このように家畜の肉を掛け売りすることで家畜の主は損失を軽減することができる。その

9) ニジェール川流域に建設された国有の灌漑農地における稲作をめぐっては，協同組合によって種子，肥料などの投入材が事前に組合員に貸し付けられ，収穫時に現物で返済する仕組みが採用されている［佐久間 2013: 276-295］。ゆえに灌漑農地で農業を営む者は必然的に債務者となる。ただしこうした前貸しは当事者によって将来返済すべき債務（garaw）とは見なされていない。他方，これとは別に協同組合による現金の貸付制度もあるが，取立ては厳しく，返済不可能な場合農地を失うリスクがあるため，利用者は少数である。

10) 結婚式や命名式において前貸しを依頼するのは，通常，花婿の友人か親族である。引用文中でハッサンは花婿の父親が返済すると述べているが，父親ではなく花婿の友人や他の親族がこの役を担うことも少なくない。

場で現金を支払うのではなく，掛売の形をとるのは，村内に現金を持ちあわせている者が多くないことによる。支払いの期日は定められるが，踏み倒される場合も少なくない[11)]。

第 3 の制度は，都市在住の仲買商人が村内で小売を営む者に対しておこなう掛売である。

> A.H. という人物には力があります。彼とその一派はパトロン（moygidey）で，たくさんの人々に掛売をしています。そのため大変な力を持っているのです。サーバ集落で小売りをしている人々はみな彼のもとに掛買に行きます。彼に借りて小売りをしているサーバの人は，H.M.，B.T.，M.S.，M.J. です。この人びと 4 人が掛売しています。売り終わると，以前借りた分を支払いに行き，かわりに新たな品物を得て，もう一度小売りするのです。
>
> ［ハッサン 2006 年 4 月 28 日］

仲買は自身の利益を上乗せした金額で小売に掛売をおこなう。小売はさらに自身の利益を上乗せして，村人に商品を売却する。このように仲買と小売が各々の経済的利益を追求するからこそ，掛売という商慣行は成り立つ。ただし，だからといって仲買と小売の関係は経済的な利害関係のみにもとづくものではない。掛売をする場合，都市部に住む仲買商人は，村落部に住む小売から商品の代金を回収できないリスクを負う。ところが，このリスクを減じるためのなんらかの措置，たとえば支払いに期日を設けたり，支払いが滞った場合の罰則（返済額の上乗せなど）が科されることはまずない。むしろ仲買が小売に掛売を認めるのは，そうした措置に訴えるまでもなく，自身と小売のあいだに信頼関係があると見なす場合のみである。ここでいう信頼関係とは，多くの場合親族関係や友人関係などと重なりあう。掛売りは，経済的関係ばかりでなく，こうした社会関係のうえに成り立っている。

以上のように，ニジェール西部農村において "garaw" と名指される慣行は，制度的とはいっても厳格なルールにもとづいて運用されているわけでもない。むしろ農村部で一般的なのは，こうした集団的な制度というより，そのつど個人的にやりとりされる小規模な貸借りである[12)]。現金収入が限られるとはいえ，いやむしろ限られるからこそ，結婚式や命名式といった

11) この点をめぐりハッサンは次のように記述している。「昨今はというと，掛売をしても人がなかなか支払いをしないので，家畜が死にそうになると，なんとか屠畜業者に買い取ってもらおうとします。〔…〕たとえ屠畜業者には買いたたかれるとしても，それでも掛売よりは望ましいわけです。というのも村での掛売は支払日になってもお金が集まらないからです。掛売の残金の支払いが終わるまでに，1 年かかる場合も 2 年かかる場合もあります」［ハッサン 2006 年 2 月 27 日］。

12) こうした私的な返済をめぐり契約書が交わされたり，返済時期が明確に定められることは希である。それだけに借金の返済をめぐるトラブルは日常茶飯事であり，ときには民事裁判へと発展することもある。だからといって借金がルーズに営まれているわけではなく，負債は返済せねばならないという規範は強く存在する。債務返済の不履行に対して罰則が科されることは希であるが，次のハッサンの説明にあるとおり，信用を失った者はその後借金をすることが著しく難しくなる。「もし借りを返さ

機会には多額の現金が動き，縁者はご祝儀などのために借金に奔走することになる。そうした場合に借金を依頼されるのは当然のことながら現金を持つ者である。商人が個人的な借金を受けいれることは希であり[13]，対象となるのはむしろ教師や看護師といった給与所得者である。わたしもまた，現金を持つがゆえに調査中は頻繁に依頼を受けた。いま考えると，債権者側から負債の現実を参与観察する貴重な経験だったといえる。ただし今回取りあげる事例は，そうした過去の村での経験ではなく，2018 年 2 月の首都における経験である。

II　事例

いったん 2015 年に遡る。8 年ぶりにニジェールを訪れたわたしは，治安上の問題とされる事柄のため，村落部に足を踏みいれることが困難になっていた。そこで住込み調査時に親しくしていた元助手を首都に呼びよせることにした。わたしには最終的に助手が 4 名いた。30 代半ばから 40 代半ばの男性である。彼らはわたしの呼びかけに応じ，首都へ駆けつけてくれた。ところがわたしは十分な準備を整えぬまま彼らを呼びよせてしまったため，宿泊場所の確保さえままならないという事態に陥った。2018 年にニジェールを再訪したわたしは，2015 年の反省から入念に準備を整えた。宿泊先として友人宅を用意し，食事，お茶，おみやげを手配した。さらにアリという知人に依頼し，彼らを車で村まで迎えに行ってもらった。

元助手が到着した翌日，午前 11：00 頃に宿泊先を訪問した。調査を予定していたわけではなかったが，ニジェール川のカバ狩りに関する映画を見ていたところ，昨年非公式にカバ狩りがおこなわれたことが話題にのぼったため，ただちに聞き取りをおこなった。調査は 2 時間ほどで終わり，その後は漫然とすごした。いま思うと，そのときから話しは弾まず，ぎこちなかったかもしれない。

17：00 頃，自身の宿泊先に戻る前に，10,000CFA フランをひとりづつ手渡した。日本円で 2,000 円相当の「心付け（sallama）」[14] である。日々の出来事をソンガイ語で日記に記し，この日もカバ狩りに関する聞き取り調査に際してノートをとってくれたハッサンにはさらに

ないと，村ではまったく借りることができなくなります。借りを返さない人だと分かると，おしゃべりのたびに，その人の借りの話しがでてきます。あの人は債務者（garaw jindi）だといわれます」［ハッサン 2006 年 4 月 22 日］。

13) 結婚式や命名式に際して商人が認める負債とは，式で消費する商品の購入に充当されるもののみであり，かつ商人が前貸しを許す相手も，式の主催者に限定される。これは集まったご祝儀で返済が可能なことによる。主催者以外の参加者には，返済可能な現金を得られる当てがないことがほとんどであるため，借金が認められることはごく稀である。

14) "Sallama" は，「帰らせる，追い払う」［Bernard et Kaba 1994: 253］，「お暇する，さよならを告げる」［Heath 1998: 268］を意味するソンガイ語である。そこから転じて，「別れ際に客人へ手渡す心付け（金銭や贈り物）」を指す。義務や習慣と呼べるほどの規範的な振舞ではないが，とりわけ相手が遠方からの客人の場合には，こうした心付けが手渡されることはかならずしも珍しくはない。

5,000CFA フランを手渡した。その後宿泊先のホテルに戻った。

18：30 頃，元助手の宿泊先の家主から電話がかかってきた。元助手が心付けに不満を述べているというのである。家主が誇張しているのではないかと邪推し，元助手に電話を替わってもらった。不満というのはほんとうか。そうたずねると低い声で，しかしはっきりといわれた。「ほんとうに不満だ（Wallahi a si kaan ay se）」。

放置することはできないので，車を持つ知人アリに迎えに来てもらい，彼らの宿泊先を訪れた。宿泊先の中庭に，元助手 4 人と，自分，家主，知人アリの 7 人が集まった。挨拶をしても誰も握手を交わさなかった。頃合いを見て，心付けが不満だったということで申し訳ないと切り出した[15]。

いったいなぜ彼らは心付けに不満なのか。この問いに対する彼らの答えは，借金のためだというものであった。以下はハッサンの説明である。

> 一昨年，おまえがやって来て，来いといった。俺たちは来た。借金（garaw）をして来た。ここに来て，家に帰った。おまえの心付け（sallama）はほんとうに足りなかった。ある者は借金を返すために家畜を売った。別の者は魚を売った。さらに別の者にはいまも借金がのこっている。このあいだおまえが来たときには，こういうことになったんだ。〔…〕今度の場合はというと，俺たちは呼ばれたので，もう一度〔村を〕発ち，来た。〔…〕いいかほんとうだぞユタカ〔＝筆者（わたし）〕，俺たちは〔家族〕が食べる食事を家に置いてきた。このサンダは，家族が食べるものを買うため借金をした。俺もそうだ。モールもそうだ。ブーバもそうだ。俺たちはここに来た。だからおまえがした心付けに固執してここにいるわけじゃない。ほんとうに俺たちはせびってるんじゃない。返済する（bana）には足りないんだ。俺たちは借金をまったく返せない。次の機会に必要になっても，得ることはできない。「あいつらは〔返済するカネを〕得られないんだ」と人にいわれる。ほんとうにもう出立できない。

そういうことなら借金の分を支払おう，いくら借金したのかとわたしは尋ねた。ところが，何度たずねても答えが得られない。そればかりか，借金の肩代わりを要求しているわけではない，おちつけと諭された。

（ユタカ）　よし，払うよ。ほんとうにおまえたちの借金の話しは不快だ。
（サンダ）　判断されるのはおまえではなく，俺たちだ。というのも今度俺たちが借金をし

15) これ以降のやりとりは，全て録音した。以下本文中での引用は，この録音データを転写・翻訳したものである。

に行ったとしても，今回払わなかったせいで，もう〔お金を借りて〕得ることができなくなるからだ。

〔中略〕

（ユタカ） さっきいったように借金の話しはほんとうに不快だ。そう，いくら借金がのこっているんだ。

（サンダ） 肩代わりしろといってるんじゃない，払えなんていっていない。ユタカ，聞いているか。かーっとなってバカになるな。落ち着くんだ。

借金があるから不満だというので肩代わりを申し出ると拒絶される。こうして話しは空転をつづけた。それを打破したのが，わたしに随行した知人アリだった。

ようやくわかったことがある。いいか。ええと，彼らが話している借金，それは借金を払って欲しいからしている話ではない。おまえが与えたもの，そこにもう少しお金を足して欲しいと彼らはいってるんだ。おまえに足せる分だけでいい。それで満足なんだ。満足して家に帰ることができる。それを望んでいるんだ。それでおまえは借金のことは放っておく。なぜなら彼ら自身が返済するからだ。彼らは帰ったらおまえからもらった分から，彼らが頼んでした借金を支払う。しかし 10,000CFA フランにもう少し足して欲しい。そういうことだと俺は理解した。

これに対して元助手のサンダが次のように応じた。

そう，それだけのことなんだが，彼は考えすぎてしまった。考えすぎるような話しじゃないんだ。ここからあそこまで〔首都から村まで〕バス代がいくらか考えてみろ。10,000CFA フランから出費しなければならない。家に帰ったら，ほんとうにもう返済できない。

ここでバス代のことが話題にのぼった。ところがわたしはバス代（片道 2500CFA フランほど）を別途払うつもりでいた。その事を告げると，とたんに全員が「やったあ」，「満足だ」と喜びを露わにした。バス代が欲しいのだったら，最初からそう述べれば良かったはずだと元助手を詰問するが，肯定はされないものの否定されることもなく，「すまなかった」とやんわりたしなめられた。

元助手の宿泊先を出たのは 22：30 頃だった。翌日，自身が別件をすませているあいだに，知人アリに車で元助手をバス停へ送ってもらい，バス代を払ってもらった。用事が済んでからわたしもバス停にむかったが，すでにバスは出発していた。以上が事例の概要である。

人類学者であれ観光客であれ，異国を訪れた外来者が過剰な対価を要求されたり，ものを強請られることは凡庸な些事にすぎない。しかしこの場合の相手は，気心の知れた元助手，金銭トラブルなど経験したことがない，いわば親友だった。その親友が，心付けとして贈った金銭をめぐって不満を露わにした。それは当時のわたしにとり，信じがたい事態だった。調査日記には次のように記されている。「そうなのだ。金なのだ。もう〔関係は〕おしまいだ」。

だが，そうではなかった。おそらく生じていたのは，「おしまい」とは逆の事態だった。理解の鍵となるのは負債である。以下で考察する。

III　考察

素朴に考えた場合，この事例をめぐる負債とは，元助手がわたしに会うために負ったという借金のことである。とはいえじつはこの借金がほんとうにあったか否かは不確かである。ルーシュの古典的研究が示すように［Rouch 1956］，ニジェール西部は，フランス植民地期以来，西アフリカ有数の移民送り出し地として知られてきた地域である。家長が短期あるいは長期にわたって不在となることは珍しくない。しかしその場合，妻や子供の面倒はおなじ「屋敷」[16] に住む別の家長が見るか，妻の実家に戻して実家で見てもらうことが普通である。借金をして家族の食事を確保するというケースは寡聞にして知らない。また，時期的に見て助手が不在の期間中に家族が食す農作物が残っていなかった可能性も低い。なんらかの事情が重なり元助手 4 名のうち 1 人ぐらい借金をした可能性がないわけではないが，全員が借金を負った可能性は低く，金額が 10,000CFA フランを上回る可能性にいたってはゼロと断じても過ぎた表現ではない。

借金が実在したか否かが不明であるのに対して，逆に明らかなことがある。元助手が交通費の支払いを懸念していた点である。首都から彼らが住む村までのバス代は片道 2,500CFA フランかかるが，2015 年の再会時，わたしは彼らにバス代を支払わなかった。2018 年の一件では，元助手が帰宅するためのバス代（2018 年分のみで 2015 年の分は含まない）をわた

16) ここでいう「屋敷」とは，ソンガイ語 "windi" の訳語であり，父系で結ばれた 3 世代ほどの家族を中心に構成される共住単位を指す（人類学用語でいうコンパウンド）。ひとつの屋敷には複数の家屋があり，それぞれの家屋には原則として夫と妻と子が住む。各家屋に住む男性家長は，多くの場合，親子関係か兄弟関係にある。したがって，ある男性家長が別の男性の家長に妻や子どもの面倒を依頼する場合，依頼を受ける家長は，依頼者の父や兄であることが多い。ただし，親子や兄弟以外の者がおなじ屋敷に住み，その人物に家族の面倒を依頼することも珍しくはない。

しが別途払うつもりだと述べたとたん，彼らが一転して満足を表明したことからしても，彼らの念頭にバス代があったことは間違いない。

では，彼らは借金などじつは負っておらず，ただバス代の支払いを望んでいただけなのだろうか。そうだと断言することはできない。わたしは問題の場に居あわせた宿泊先の家主や知人に対して，元助手にほんとうは借金などなくバス代が欲しかっただけではないかとたずねた。ところが彼らはこの意見に同意せず，むしろ元助手の主張に理解を示した。彼らが元助手に適当に話をあわせたとは考えにくい。通常こうしたケースでは，その場にいる人間に同意するものであるが，そうではないからである。つまり元助手が負ったという借金には，第三者が真実と受け止める，あるいは公然と否定することを躊躇させるようなリアリティがたしかにあったのである。

さらに重要なのは，借金がほんとうにあったにせよ，なかったにせよ，なぜ元助手は，わたしが借金を肩代わりすることを拒んだのかという点である。先述の通り，問題の一件があった直後のわたしは，彼らと自分のあいだには金銭関係しかなかったのだと悲観した。だが彼らがたんに金銭を欲していたとするなら，逆に説明できないことがある。彼らが借金を肩代わりするというわたしの提案を断った理由である。借金があろうとなかろうと，その補填分として現金を得る方が彼らにとって利益になることは明らかである。ところが彼らはあくまで提案を拒む。

そればかりではない。彼らは借金がいくらかを最後まで語らなかった。適当に述べて金額をつり上げることが可能だったにもかかわらずである。彼らがくりかえし強調しているのは，ただ，もらった金額では，自分たちの借金は返しきれないという点のみなのである。

ここがもっとも重要なポイントである。彼らが負ったという負債は金銭の借りであり，明らかに経済的な意味での負債である。しかし，それはわたしには払うことはおろか，数えることもできない負債，現実に存在するか否か不明瞭であるにもかかわらず，社会的リアリティは確実に有している負債だった。これこそが，負債の経済的な意味から溢れ出してしまう過剰さを備えた負債，社会的負債である。自己の利益の最大化という経済的動機からは説明できないこの負債をいったいどのように理解すればよいのか。

そのヒントになるのがグレーバーの見解である。インタビュー集『資本主義後の世界のために』［グレーバー 2009］のなかで彼は次のように述べている。

> ほとんどのアフリカ社会では，人びとは負債を帳消しにしないように気を配っている。もし帳消しにしてしまうと，人びとはそれ以上関係をつづける理由をなくしてしまうからである。正確に借りた額を返済するということは，可能性としてその関係は終わった

ということを意味する。だから多くのアフリカ社会において，人びとが大切にするのは，十分に返さないか，多く返すことなのである。

［グレーバー 2009: 112］

この見解が卓越しているのは，負債がまったく返済されない場合はもちろん，正確にすべて返済されてしまうと社会関係が終わってしまうことを指摘している点である[17]。ゆえに負債は少し少なく返されるか，多く返される必要がある。同様のことをグレーバーは『負債論』のなかでも言及している。

だれもがだれかに対して，いつもほんの少し負債があるようにすることによって，たとえそれが大変脆いものであったにしても，彼女たち〔ティブ族の女性たち〕は実際に人間社会を創造していたからである。その社会とは，三個の卵とかオクラ一袋を返済するといった義務や，生成や再編をくり返す――いつでも個別の義務は清算できるので――紐帯からなる精妙な網の目のことである。

［グレーバー , 2016: 184］

ここで問いたいのは，こうした脈絡においてグレーバーが「負債」と呼ぶものは，冒頭で参照した彼の定義に反して，かならずしも計量化可能である必要はないという点である。むしろ計量化が不可能である方が，負債は完済されず継続していくはずである。あるいは計量化が可能であっても，あえてその可能性を排除することで，負債の継続がはかられるかも知れない。元助手の一見不可解な言動に伺えるのはまさにこうした負債の論理である。

元助手がバス代を望んでいたとしよう。だとすると彼らは，自分の必要のために贈与された以上の現金を要求することになる。その結果何が生じるか。元助手がバス代を払ってもらうということは，彼らがユタカ（＝調査中のわたし）に対して社会的な負債を負うということである。こうした負債を避けようとする限り，ユタカにバス代を払えとはいえない。一方，元助手がユタカの求めに応じて借金を背負ってでも首都に駆けつけたことは何を意味するか。このことは逆に，ユタカが元助手に対して社会的負債を負ったことを意味する。ただし，ユ

17) 同様のことは，リーチによっても的確に指摘されている。「どのような脈絡においても，負債が完全に支払われてしまえば，債務者と債権者の関係は終わってしまう。／ある種の関係は，まさにこのようなものである。私が一ダースの卵を買いに市場に行くとすれば，私はそこで全額を支払い，次の週に，その市場の同じ屋台に戻ってこなければならない義務を負わない。しかし，もし，私がお得意であり，屋台のあるじが，私がたまたま金が足りなかった為に，つけて物をくれたとすると，私は，そこで戻る義務を持つことになる。そして，また，そこを訪れた時には疑いもなく，また買い物をする。そういうふうに関係は続いていく」。「長続きのする関係は，借りがあるという感情としてのみ，存在する」［リーチ 1991: 200-201, 203］。

タカが元助手に借金があることを知らないとこの負債は生じない。ゆえにユタカに告げる必要がある。俺たちはおまえのために借金をしたのだ，と。最後に元助手の借金をユタカが肩代わりしたらどうなるか。清算されるのは，経済的には元助手が村の借り手に負った借金である。しかしより重要なのは社会的な位相である。つまり，ユタカが借金を肩代わりしてしまうと，ユタカが元助手に対して負う負債，借金までして駆けつけてくれた元助手に対する社会的･精神的負債が清算され，人間関係が解消されるおそれが生じる。ゆえに元助手が負った借金は，あくまで「彼ら自身が返済する」（知人アリの表現）必要があったのである。

こうして見ると，元助手が借金の肩代わりを拒んだ理由が理解できる。負債は清算されてはならない。それは少し少なくお返しされる必要がある[18]。ゆえにこの事例の場合，ユタカの心付けは自分たちが負った借金より少ない必要があった。借金を返済されることがあってはならない。ゆえに借金がいくらあると語るわけにはいかない。それが語られてしまった瞬間，ユタカはその額を支払い，彼が元助手に負っていた負債は清算されてしまうからである。

要するに事例のなかで志向されていたのは，利益の最大化ではなく，自らが負う負債を最小限にしつつ相手が自らに負う負債を最大限にする情況である。ゆえに借金は額が明かされることも肩代わりされることもなかった。これぞ負債をめぐるポリティクスだったのである。

お わ り に

負債を考察するうえで重要なのは，かならずしも負債がいかに返済されるかという点ではない。むしろそれがいかに完済されないか，という点である。それが既存の社会関係を強化し，ときにはあらたな関係を作り出す。本稿の事例が物語るように，貨幣価値に計量化可能な負債さえ，ひとたび社会関係のなかに埋めこまれてしまえば，数えることも払うこともできない社会的な負債に変質しまう。逆にいうと，こうした負債の変質をただちに理解できず，

18) グレーバーの議論によるなら，負債は少し少なく返されるばかりでなく，多くお返しをされる場合もある。では，なぜこの事例において「多く」ではなく「少なく」お返しされることが志向されたのか。仮にユタカが元助手に負債額以上の金銭を支払った場合，元助手はユタカが自分たちに負う以上の負債をユタカに対して負うことになる。つまり，「多くお返しをされる」と元助手は，立場の強い債権者から立場の弱い債務者に転じてしまう。ゆえに彼らは，「多くお返しをされる」ことを――たとえそうした方がより多くの金銭を得られるとしても――望まない。こうした事例において「多くお返しをされる」ことを志向するのは，本来，ユタカ（の立場にたつ者）である。たとえば，元助手が心付けに不満を表明した際に，ユタカがこころよく――金額を問い詰めたりせず――金銭を上乗せしていたなら，元助手はそれを受けとっていたかもしれない。この場合，ユタカは立場の弱い債務者から立場の強い債権者に転じることになる（後述の論点との関わりで述べるなら，「パトロン」と見なされる人物に求められるのは，一般的に，こうした寛容な振舞にほかならない）。ところが問題の事例においてユタカは，こうした負債の論理を理解していない。それゆえ事態はこじれたのである。ただし念のため強調しておくなら，より少ない返済が志向されるかより多くの返済が志向されるかは二次的な問題にすぎない。問題の核心はあくまで，負債が完全に返済されない情況が担保されるか否かという点，およびそのことによって関係の継続が実現されるか否かという点にこそある。

元助手の言動を不可解に感じてしまうのは，わたしたちが貨幣によって社会関係を清算することに慣れすぎているからなのかもしれない[19]。

こうした負債をめぐるポリティクスはつねにどこでも作動するものではない。むしろそれは既存の人間関係が解消される可能性が高いときこそ作動をはじめる。問題の一件が起きたとき，わたしは元助手との関係が終わったと感じたと述べたが，元助手にとってはむしろ逆で，ユタカが村に来ることすらできなくなり，このままでは関係が解消されかねないからこそ，あのような行動をとったと考える方が解釈として妥当である。じっさい彼らは，問題の一件において，このままでは二度と借金ができなくなり，ユタカに呼ばれてもニアメに来られなくなるとくりかえし強調していた[20]。不満を表明したのは関係を終えたいからではなく関係を継続するためだったのである。

わたしは住込み調査時，人びとから「一度離れれば二度と来ない白人」として表象されていた［佐久間 2013］。土地を与えるという申し出を断り，村を離れてその後なんの音沙汰もなくなったわたしは，たしかにそのような存在となりはてた。ただ，気心の知れた元助手は，まさに気心が知れているがゆえに，それとは別の存在としてわたしを位置づけていたわけである。ではそれはより具体的にはいかなる関係なのか。論の結びとして補足的に検討してみたい。

じつは元助手は事例の出来事のなかで次のように述べている。

> だから〔おまえは〕パトロンみたいなものだ。ともに仕事をする。もしおまえが来いというのなら俺たちは来る。というのも，また遠くに行ってしまうことを知っているからだ。もし互いが好きなのなら，互いに支えあうのが人生というものだ。

ここでわたしがパトロンと訳したのは，ハウサ語 "majiɓinci" に由来する "moygida" というソンガイ語である。辞書には「家長，パトロン，雇い主」［Hamani 1984: 83］とある。対

19) こうした観点に立つと，問題の事例をめぐり経済的なものから社会的なものへ変質した事柄がもうひとつある点が判明する。元助手のために支払われたバス代である。それは，問題の一件を経ることでたんなる交通費以上の何かになったのではないか。元助手の主張が正しいとすれば，ユタカがバス代を払ったところで彼らが負った借金が返済されるわけではない。ただしユタカがバス代を払うことは，彼らがそうした多大な負債をかかえていること，それほどの無理をしてまで自分のために会いに来てくれたことをユタカが認めたことを意味する。いわばそれは，バス代などではとうてい返済しきれない負債をユタカが負うことの証となった。グレーバーの花嫁代償をめぐる言葉を借りるなら，「通貨は負債を清算するためではなく，通貨によっては清算不可能である負債の存在を承認するために贈られることもある」［グレーバー 2016:202］のである。

20) 本文中で参照したハッサンの発言における「次の機会に必要になっても，得ることはできない」という表現，およびサンダの発言における「今度俺たちが借金をしに行ったとしても，今回払わなかったせいで，もう〔お金を借りて〕得ることができなくなるからだ」という表現を参照。

義語は "koociya" で，元来は「子供」，派生的に「追随者，召使，弟子」という意味になる語である［Olivier de Sardan 1982: 255］。注意したいのは，どちらの語彙にも家族関係の意味と経済関係の意味が含まれている点である。このことから伺えるように，"moygida" と "koociya" との関係は，恩や義理といった精神的な結びつきと，経済的な雇用関係にまたがる人間関係，まさしく人類学でいうパトロンークライアントに相当する関係である。

さらにいえば，パトロンークライアント関係とひとくちにいっても内実は様々であるが，「おまえが来いというのなら俺たちは来る。また遠くに行ってしまうことを知っているからだ」という元助手の言葉に着目するなら，より具体的なパトロン像を提示することが可能である。本稿 II において信用制度をめぐる事例のなかで取りあげた都市在住の仲買商人と小売の関係である。仲買が農村の小売におこなう掛売こそ，ニジェール農村部にある数少ない信用制度，"garaw" のひとつである。仲買と小売は互いに利益を追求するが，その前提となるのは両者のあいだに経済的利害によっては揺るがない社会的な信頼関係が成立していることである。無論わたしは商人ではない。しかし元助手の視点からすると，農村で小売りに商売をさせて間接的に利益を得る仲買と，農村で助手に調査をさせて間接的に資料を得る研究者とのあいだに大差はないのかもしれない。

本稿の冒頭で見たように，金銭を「払う」という行為の根底には，負債にもとづく宗教的・精神的関係を精算する＝「祓う」という含意が控えていた。元助手とユタカのあいだにあったのは宗教的な関係でこそなかったが，パトロンとクライアント（都市部の仲買と農村の小売）に比せられるような，たんなる経済的関係にとどまらない社会的・精神的含意が備わっていた。この点に仮託して述べるなら，元助手達が志向していたのは，失われつつあった両者の関係を維持・強化することであって，金銭の支「払い」によって関係を「祓う」ことではなかった。むしろ負債は積極的に「払えぬ＝祓えぬ」ものとされる必要があったのである。

このように考えてみたとき興味深いのが，グレーバーが，互酬主義的な交換論を批判するために参照している「互酬性への期待が壁にぶちあたってしまう事例」である[21]。それによると，誰かの命を救ったところ，救われた人から衣服やナイフといった贈り物を要求されるという事例が世界中に見られる。命を救われたからには，救われた人こそがお礼をしそうなものであるが，そうではない。グレーバーがアフリカにおける治癒者兼政治家の事例をふまえ

21)「溺れているところを助けられた男が，素敵な衣服をくれるよう救命者に要求した話。虎に襲われて治療を受けたあとでナイフを要求した者の話。〔…〕アフリカの多くの地域では，熟達した治癒者（curer）は政治的にも重要人物であり，かつての患者〔命を救われた者〕を広範に及ぶ縁故者として抱えている。〔…〕この場合，問題を複雑にするのは，〔…〕大人物の追随者たちが，比較的強力な交渉権を有していることである。〔…〕大人物たちには，その追随者たちがライバル陣営に走らないよう寛大にふるまうことが期待されている。こう考えてみると，シャツやナイフを要求することは，宣教師たちがその男を追随者として望んでいるかどうかを確認する行為だったということになる」［グレーバー 2016: 139-140］。

て考察するところによれば，それは不思議なことではない。大人物つまりパトロンは，追随者の支援を必要とする。ゆえに彼には寛大に振る舞うことが要求される。このような情況において追随者は，自分が彼に望まれているかを確認するため，贈り物を要求するのである。

命を救われた者が救った者にさらに贈り物を要求するという構図は，贈り物をされた元助手がさらに贈り物を要求する本稿の事例の構図と通じるものがある。本事例の贈与者は政治的支援こそ必要としていなかったものの，調査上の支援を必要としてした。だとするなら，元助手は，彼らのパトロンが自分たちを追随者として望んでいるのかを確認するためにあのような行動をとったのかもしれない。真相は分からない。ただ，すくなくとも結果として彼らは，眼前のパトロンが自分たちを追従者として望むような態度をとることをたしかに確認したといえる。

とはいえ本稿で提示した解釈において，行為の当事者にいかなる思惑があったかという点は，どちらかといえば付随的な問題にすぎない。肝要なのは，人びとがいかなる思惑のもとで行為するにせよ，結果として負債が完済されず，ゆえに人びとの関係が維持・強化される点にこそある。人が明確な意図を持って負債を操作するのではない。むしろ人は負債に「憑かれ」，否応なく行為するのだ。

かつての助手にとり，現在のユタカは，村の外部にいて村の者とかかわり，その経済活動に影響をおよぼすパトロンのような存在として映じていた。今後ユタカは，そうした存在として負債を負い，負債を負わせる関係を生きるべきなのだろうか。現段階でその答えは出ていない。元助手と交際を通じて探り当てていかなければならないと彼は考えている。しかし，こうした思索を余儀なくされている点にこそ，彼自身が元助手もろとも負債のポリティクスに絡めとられ，祓えぬ負債に憑かれていることが証されているのかもしれない。

謝　辞

本稿は，2018 年 4 月 28 日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）で開催されたシンポジウム「負債をめぐるポリティクス――東南アジア，オセアニア，アフリカの事例から」（主催：AA 研基幹研究人類学「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究―人類学におけるミクローマクロ系の連関２」における口頭発表「祓えぬ負債に憑かれること―ニジェールにおける経験から」にもとづくものである。同シンポジウムではコメンテータである中川理氏（立教大学）をはじめ，多くの方々から貴重なご意見をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。なお本研究は，JPSP 科研費 15H05385，17H00948，17H02328，17K18480，および 2017-2019 年度東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「ダイナミズムとしての生――情動・

思考・アートの方法論的接合」（代表：西井凉子）の成果の一部です。

参 考 文 献

栗本慎一郎
2013『経済人類学』東京：講談社.
グレーバー , デヴィッド
2009『資本主義後の世界のために――新しいアナーキズムの視座』高祖岩三郎（訳・構成），東京：以文社.
2016『負債論――貨幣と暴力の 5,000 年』酒井隆史（監訳），高祖岩三郎・佐々木夏子（訳），東京：以文社.
佐久間寛
2013『ガーロコイレ――ニジェール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌』東京：平凡社.
2018「自由と負債――カール・ポランニー 2.0 の経済人類学」『哲学』140: 113-145.
サルトゥー＝ラジュ , ナタリー
2014『借りの哲学』高野豊（監訳），小林重裕（訳），東京：太田出版.
シェネ , フランソワ
2017『不当な債務――いかに金融権力が，負債によって世界を支配しているか ?』長原豊・松本潤一郎（訳），東京：作品社.
杉村和彦
2004『アフリカ農民の経済――組織原理の地域比較』京都：世界思想社.
スコット , ジェームズ
1999『モーラル・エコノミー――東南アジアの農民叛乱と生存維持』高橋彰（訳），東京：勁草書房.
ポランニー , カール
1998『人間の経済Ⅱ――交易・貨幣および市場の出現』玉野井芳郎・中野忠（訳），東京：岩波書店.
ラッツアラート , マウリツィオ
2012『〈借金人間〉製造工場――“負債”の政治経済学』杉村昌昭（訳），東京：作品社.
リーチ , エドマンド
1991『社会人類学案内』長島信弘（訳），東京：岩波書店.

Bernard, Yves

2007 *Dire la sante avec des proverbes: Proverbes zarma-songhay du Niger: Essai*, Paris: L'Harmattan.

Bernard, Yves et Mary White-Kaba

1994 *Dictionnaire Zarma-Français (République du Niger)*, Paris: Agence de coopération culturelle et technique.

Bornand, Sandra

2005 *Le discours du griot généalogiste chez les Zarma du Niger*, Paris: Karthala.

Elyachar, Julia

2010 Phatic Labor, Infrastructure, and the Question of Empowerment in Cairo, *American Ethnologis* 37(3): 452-464.

Hamani, Abdou

1984 *Saruusey ce-diraw sanniizey: Vocabulaire administratif zarma-français*, Niamey: Université de Niamey.

Heath, Jeffrey

1998 *Dictionnaire Songhai-Anglais-Français: Tome 3-Koroboro Senni*, Paris: L'Harmattan.

IBRD (International Bank for Reconstruction and Development)

2018 *The Little Data Book on Financial Inclusion*, Washington: World Bank Group.

Olivier de Sardan, Jean-Pierre

1982 *Concepts et conceptions songhay-zarma: Histoire culture Société*, Paris: Nubia.

Saiag, Hadrien

2014 Towards a Neo-Polanyian Approach to Money: Integrating the Concept of Debt, *Economy and Society* 43(4): 559- 581.

Sakuma, Yutaka

2017 Who Owns This Land?: A Polyphonic Approach to the Agrarian Regime in Songhai Society (Western Niger), *Japanese Review of Cultural Anthropology* 17(2): 5-23.

Rouch, Jean

1956 Migration au Ghana (Gold Coast): Enquete 1953-1955, *Journal de la societe des africanistes* 2: 33-196.

Triki, Thouraya and Issa Faye eds.

2013 *Financial Inclusion in Africa*, Tunis: African Development Bank.